

2019年度「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業」

事業実施報告書

- | | |
|-----|------------------------------------|
| I | スポーツ及びオリンピック、パラリンピックの意義や歴史に関する学び |
| II | マナーとおもてなしの心を備えたボランティアの育成 |
| III | スポーツを通じたインクルーシブな社会（共生社会）の構築 |
| IV | 日本の伝統、郷土の文化や世界の文化の理解、多様性を尊重する態度の育成 |
| V | スポーツに対する興味・関心の向上、スポーツを楽しむ心の育成 |

道府県・政令市名【 群馬県 】

学校名【 群馬県立二葉特別支援学校 】

| | |
|--------------------|--|
| 1 実践テーマ | I・III・IV・V |
| 2 実施対象者 (学年・人数) | 本校児童生徒 97名 (小学部1年～中学部3年) 本校職員 108名 ※令和元年5月1日現在 |
| 3 展開の形式 | (1) 学校における活動 ① 教科等名 (国語科、体育科、音楽科、外国語科、外国語活動、総合的な学習の時間、生活単元学習、自立活動) ② 行事名 (先輩との交流会) ③ その他 (ボッチャ体験会、座談会 ※講演会と同日開催) |
| 4 目標 (ねらい) | ○オリンピック・パラリンピックの歴史や競技について知るとともに、オリンピック・パラリンピックが開催されることへの期待感を高めることができる。 ○オリンピック・パラリンピックに関する運動や音楽に触れる中で、周囲の状況を把握しようとする意識を向けたり、状況に合わせて身体を動かしたりすることができる。 |
| 5 取組内容 | <p>本校の児童生徒は、学習面や健康面、身体の動き等の実態差が大きい。そのため、事業にかかわる実践に取り組むためには、その実態差に合わせた取り組み内容を柔軟に検討していく必要があった。</p> <p>以下紹介する取り組み内容には、学校全体で取り組んだものもあれば、各クラスの授業内容に関連させて取り組んだものもある。</p> <p>学校全体で取り組んだオリンピック・パラリンピック教育</p> <p>○先輩との交流会</p> <p>日本ボッチャ協会強化指定選手である周藤穂香さん、アシスタントを務める周藤美穂さん、DET群馬代表の飯島邦敏さんを招いて、実施した。交流会の流れは、以下のとおりである。</p> |



1. ボッチャ体験会

ボッチャの用具に触れたり、的に目がけてボールを転がしたりする時間を設定した。以前より、授業の中で、ボッチャの活動に取り組むことはあったが、何度も経験している児童生徒もいれば、あまり馴染みのない児童生徒もいた。体験会の機会を設けたことで、全員が集まり、全員がボッチャの活動に取り組むことができた。

2. ボッチャ実演会

ボッチャ競技において、使用する様々な用具や競技ルールの解説とともに実演を行っていただいた。離れたところに転がったジャックボールにぴたりとボールを寄せる様子を見て、思わず歓声をあげる姿が見られた。操作性の高さという点では、理解が難しい児童生徒からは、競技時の静けさや競技後の歓声をよく聞き、その変化を感じ取る様子が見られた。



3. 講演会

講師である周藤穂香さんが、アシスタントの周藤美穂さんと一緒に、ご自身の競技生活の様子や、ボッチャとの出会い、現在の生活で努力していることなどを話してくださいました。パワーポイントの資料及び映像資料を用意して下さったり、質問に答えていただいたりしたこともあり、児童生徒は、先輩である周藤さんのことについてもボッチャ競技のことについても、より深く知ることができた。



4. 給食座談会

周藤穂香さん、周藤美穂さん、飯島邦敏さんを囲み、一緒に給食を食べながら座談会を行った。講師の方々からも児童生徒に質問をしていただいたこともあり、様々な点について意見交換をすることができた。



各クラスの授業内容に関連させて取り組んだオリンピック・パラリンピック教育

○国語科「オリンピック・パラリンピアンについての学習」
教育出版「言葉でつかんだ世界」に登場する車イステニスブ

レーヤー国枝慎吾さんを取り上げ、国枝さんの生い立ちや、活躍の裏にある苦悩等を学習した。同じ車イステニスプレーヤーである上地結衣さんについての学習も行った。

オリンピック・パラリンピックが開催されると聞くと、輝かしい場面を想像するが、その背景には各アスリートの努力や苦悩等があると知ると、生徒達もより真剣な表情で学習に臨んでいた。



○外国語科（英語）、外国語活動

「オリンピック・パラリンピックを観戦に訪れた

外国人観光客と会話をしよう」

小学部の外国語活動、中学部の英語の授業において、オリンピック・パラリンピックを観戦するために来日した外国人観光客と会話をする場面設定を行った。小学部は We can 2 より「Welcome to Japan」、中学部は New Crown 2 の「How can I get to ~?」の単元で学習を行った。

オリンピック・パラリンピックの各競技やその競技会場等を話題にあげながら学習をしたことで、より関心をもって学習する姿が見られた。

○総合的な学習の時間「オリンピック競技を体感しよう」

児童生徒は、テレビやインターネットをとおして、オリンピック・パラリンピック競技を見聞きすることがあるが、実際に競技の様子を観戦することは少ない。周藤さんが競技する様子を真剣に見つめる姿が見られたことから、別の競技についても生で見ることができればよいと考えた。そこで、本校職員の中に、空手競技に取り組む職員がいたことから、空手の型を披露してもらうことにした。一つひとつの動きの速さ、風をきる音などを体感することができた。



○体育科「ボッチャをしよう」

ボッチャの競技は、本校の児童生徒にとって一番馴染みのあるパラリンピック競技であり、各クラスで取り組んできた。ただし、先に述べたように、本校の児童生徒の実態差は大きいいため、その活動のルールや、使用する用具について柔軟に考え、展開する必要があった。



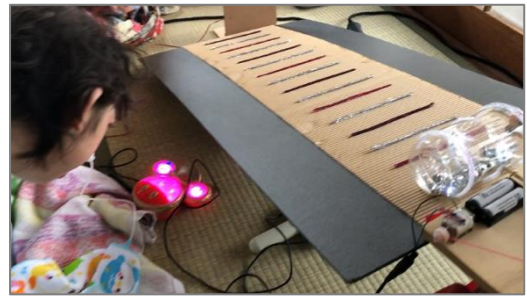
・ボッチャのルールについて

ジャックボールを目がけてボールを転がし、得点を競うというルールの理解が難しい児童生徒もいることから、ルールを柔軟に考えた。得点の計算がしやすいように得点マットを使用したり、ボウリングのように倒したピンを計算するルールを取り入れたりした。



・用具について

直接ボールを握って競技をする児童生徒もいれば、ランプスを使用してボールを転がし、競技する児童生徒もいる。ランプスであると、その大きさや形状により、手足を伸ばしづらい児童生徒もいることから、幅のあるスロープを使って、ボールを転がすこともあった。また、視覚的にボールやボールの動きを捉えづらい児童生徒のために、ボールの転がる面を黒くしたり、ボール自体を手作りして、ボールの内側で光が点滅するようにしたりする試みもあった。



○生活単元学習「友だちにボッチャを伝えよう」

学校間交流を行う地元の小中学校の児童生徒が、本校を訪れ、交流を行う際に、ボッチャに馴染みのある本校の児童生徒が、地元の小中学校の児童生徒にボッチャのルール等を紹介した。



○自立活動「オリンピック・パラリンピックに触れよう」

ボッチャ、野球、卓球、バスケット、バドミントンのボールや羽に触れ、重さや大きさなどの違いを感じる活動を行った。また、過去の競技のダイジェスト動画を見る時間を設定した。

マスコットキャラクターのミライトワ、ソメイティの画像を使用して、見本合わせの学習を行った。



○音楽科「パプリカを聞こう、歌おう」

2020応援ソングである「パプリカ」を音楽の授業で取り入れた。歌唱や身体表現などの「表現」として取り組んだ児童生徒もいれば、「鑑賞」として取り組んだ児童生徒もいた。また、どの児童生徒にとっても馴染みのある曲となったため、集会などの場で「パプリカ」の演奏を行うこともあった。



6 主な成果

学校全体で取り組んだオリンピック・パラリンピック教育もあれば、各授業内容に取り入れる形で取り組んだオリンピック・パラリンピック教育もあった。児童生徒の実態差が大きいため、学校全体で特定の手法を共有して実践することは難しく、クラスごとに取り組んだ実践が多くなった。児童生徒の実態や取り上げる頻度はクラスによって異なったものの、どのクラスもオリンピック・パラリンピックの学習や関係する運動、音楽等を実態に合わせ、継続して取り上げてきた。それにより、見られた成果を整理する。

○オリンピック・パラリンピックに関する知識の習得

オリンピック・パラリンピックの歴史や競技についての学習を積んだ児童生徒からは、オリンピック・パラリンピックを学校生活の中で話題に挙げるが増えた。世間の意識の高まりとも合わせて、開催への期待感も少しずつ高まってきたと捉えることができる。

○継続した取り組みが育んだ見通しと学習意欲の高まり

本校では、多くのクラスがボッチャ競技及びパプリカの歌唱、鑑賞に継続して取り組んできた。継続して取り組んだことによって、児童生徒の中には徐々に見通しが生まれた。学習活動に見通しが持てるということは、分かる状況が増えるということであり、見通しを支えに、より意欲的に身体を動かして表現をしようとしていたり、周囲の状況を把握しようとしていたりする姿が見られるようになった。

○馴染みのある活動が支える主体性

ボッチャ競技やパプリカの歌唱に馴染んだことで、ボッチャなら分かる、パプリカなら歌えるという意識を持つ児童生徒がいた。それまでであれば、馴染みのない他クラスの児童生徒や教師、学校間交流で出会う相手校の児童生徒とかかわり合うときに、恥ずかしくなり、自分の気持ちの表出を控えていた児童生徒が、ボッチャやパプリカの活動をとおしてであれば、自分からかかわろうとするようになった。馴染みのある活動が、他者とかかわり合いにおける主体性を支えたようである。

| | |
|--------------------------|--|
| | <p>○友だちと共有できる活動の増加</p> <p>各クラスで実践を行ったことから分かるように、本校は各クラスの実態差が大きく、学習形態が異なる。それにより、友だちとのかかわりが限定的になる側面がある。そのような中で、どの児童生徒も共通してボッチャやパプリカに取り組んだということは、友だちと共有できる場面が増えたということである。学年集会などで、実態差が異なる児童生徒が集ったときに、自然と一緒に身体を動かしたり、歌ったりする様子が見られた。</p> |
| 7 実践において工夫した点 (事業の特色) | <p>実態差が大きい本校の実情を考えたときに、学校全体として同じ取り組みを行うことが難しかった。そこで、どのようにしてオリンピック・パラリンピック教育を行うかという視点だけでなく、本校の児童生徒一人一人にとってのオリンピック・パラリンピック教育とは何かという視点も持って実践を行ってきた。それにより、各クラスより多様な取り組みが集まった。</p> <p>また、各クラスで取り組んだ活動を学校間交流等でも行い、学習を深めた点も、実践における工夫点である。</p> |
| 8 主な課題等 | <p>本校のように健康面や学習面、身体の動き等において実態差のある学校では、取り組み内容を柔軟に検討する必要がある。各教科の学習と合わせる形で実践を行ったが、他の学習内容もある中で、どのような形で学習を進めていくかについては、今後も検討しなくてはならない。</p> <p>また、来年度はオリンピック・パラリンピックが開催される。開催が近づくにつれて、社会全体の盛り上がりを感じる場面が増えると思われる。開催される年だからこそ行える実践も、積み重ねたオリンピック・パラリンピック教育を継続して生かすことのできる実践も検討していかなくてはならない。</p> |
| 9 来年度以降の実施予定 | <p>本校においてボッチャは馴染みのある活動となっている。社会的にも認知されるようになってきたことから、年数回行われる交流の場等で、本校の児童生徒がボッチャをはじめとするパラリンピック競技を周知する役割を担ってもよい。</p> <p>今年度の実践をもとにしたオリンピック・パラリンピック教育を行っていきたい。</p> |